

学会講演会のあり方について、 再度の意見

近藤 純正*

この1980年の京都における気象学会秋季大会のプログラムを受け取って、発表数が245にも増加しているのは大変おどろいた。この講演発表数は1978年秋の仙台における講演発表数136より109題も増えている。このような傾向は喜ばしいことではあるが、大会のあり方を早急に改めなければ「講演会とは単なるお祭」になってしまう。

筆者が1976年9月号の「天気」に投稿した「気象学会の大会運営と気象集誌論文の数に思う」をおもい出して読んでみた。そのときの資料にその後の動向を加えて、図に講演数と気象集誌論文数の変化状況を再び示してみた。今回の講演数の増加は、この20年間の増加傾向の1つの流れの中の、ありうべき程度の変動値であるとみなされる。今回のこの大きな変動値の原因をプログラムから探してみると、関西地区の研究者の発表が特に多く、61題も含まれている。これは関西支部における学会活動が盛んなことのあらわれであろう。

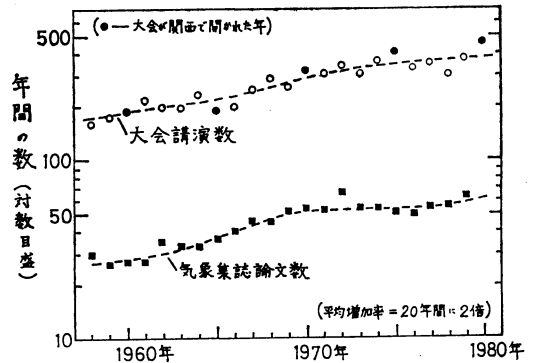
年2回の講演会は、気象同好者が各自の研究成果を持ち寄って発表・討論し、おたがいの学問水準を高め新分野を開拓していく役割と親睦(まつり)の性格の2つの面をもつと割り切りたい。それで今後の講演会のあり方について、次の具体案を提出する。

(1) 発表論文の種類を分ける

これは前回(1976年)の意見にもあったもので、論文を(A)正論文、(B)中間報告 および速報・紹介の3種類に分ける。A論文は完成論文で「気象集誌」などの国際誌と「天気」に6ヶ月以内に投稿予定をしているもので第1会場で発表する。B論文はそれ以外の論文および未完成の中間報告的なもので、第2・3会場で発表する。

最近、予稿集を読んでも内容を含んでいなかったり、

【投稿募集】 この欄は気象学ないしその関連分野の学問上の問題や将来展望、学会活動への提案など、会員の建設的意見を自由に発表し合う場です(長さ400字×10枚以内)。



よく理解できないものがある。それでA論文を発表したい者は1ヶ月早く申込み、2名のレフリー(主として講演企画委員があたる)に読んでもらって、2名によく理解されないと判断された内容のものは改稿を要求する。それによって講演会では十分な討論ができるようになり、その結果「気象集誌」投稿後の処理がスムーズに行なわれる。

(2) 予稿集を利用すること

文字が小さいスライドは講演内容が理解できない。1枚のスライドに入れる行数の上限は10行とし、これ以上のものは受け付けない。こまかな事は予稿集にて示すこと。予稿集には結果の内容を書き、「結果は講演会で発表する」というような予稿は書かないこと。予稿が書けない論文は次回にまわすか速報として申し込む。

(3) 速報・紹介の取扱い

従来の講演申し込みの期日に結果が出ていないものや、申し込んでから研究を始めるような速報的論文がかなりあるように見うけられる。この種のものには予稿集に結果が書けないので速報とする。そのほか、例えば、気象研究所新庁舎と観測塔の写真紹介とか何々の調査旅行

* Junsei Kondo, 東北大学理学部。

	A論文 (35編×春秋2回)	B論文	速報・紹介
会場	第1会場	第2・3会場	壁面
発表時間+(討論時間)	15分+(10~15分)	10分+(2~5分)	1~3日間*
スライド枚数の上限	12枚	8枚	
予稿枚数	1または2枚	1枚	
予稿またはビラ提出日	B論文より1ヶ月早く	従来どおり	2日前

* B論文の各セッションのあとに、各自の速報の要旨を1~3分間で紹介させる。

の風景とか何々新装置の……等、研究論文というよりは単なる紹介で、パネル発表が適しているものは紹介とする。これら速報・紹介の発表は、予稿集を書かないで発表申込みは題名だけで行ない、従来の口頭発表をさせないでパネル発表とする。

速報・紹介はA4版かB4版用紙数枚に写真や図それに説明文を書き、それを講演第1日目の2日前までに大会委員長宛に郵送し会場内の壁面に張ってもらう。第1日目と第2日目のB論文の各セッションのあとに速報・紹介の時間を設け、1~3分間で各自の要旨を紹介させる。速報・紹介のビラを休憩時間に見てまわるのも楽しいことではないか。

(4) 発表論文は2つに分割しない

講演時間が短くなると、10分間程度ではとても内容を話せない。それで発表を1と2に分けて2倍の時間をとるような論文が増える。この気持はだれも同じであるが、同一内容や連続した論文は1つにまとめること。今回も1つにまとめてよいと思われる論文が14人×2題ある。

(5) 講演時間は超過しない

「持ち時間を超過した場合には座長が講演を打ち切り……する場合がある」という規則があるが、気の弱い座長はなかなかこの事項を発動させないし、また一方では、気の強い座長は1セッションで平気で30分も時間超過をさせてしまう。休憩時間は予定どおりとってほしい。休

憩時間中の個人的討論も大切である。時間オーバーは10分間程度にしてほしい。

終了時間になってベルが鳴っても、それに気づかない講演者もいる。時間がきたときは、ライト係が室内電燈を点燈にし、強制的に終了時間を知らしめること。

講演時間はできるだけ正確に進行させて、他会場に予定時刻に移動すれば目的の講演をきけるようにしておくこと。

(6) その他

大会の日数を多くするよりは、夜のセッションを設け、特殊テーマなどはそこで発表する。会場数はいまのところ3会場より増やさないほうがよい。分野の分類はあまり細分化しないで、できるなら同一会場で他専門の人とも討論するのが望ましい。

それでも、4会場が必要な場合は参加費を増額して、そのための学会費の値上げは控える。ただし、地元の人などで半日とか1日分だけ講演をききたい人は自己申請によって参加費は従来どおり500円とし、2日以上参加者は1,000円とする。そうすれば皮算用500円×200人=10万円の増収で、大会運営は何とかなりそうである。

図をみてわかることは、大会が関西で開催された年は講演数が最近特に多いので、この場合にかぎって4会場制にするのも1つの手であろう。ただし大会の運営の仕方をかえないで4会場制にするだけの改変はあまり望ましい方向ではない。